

ZEN 48号 2013.8

発行・編集 全道美術協会事務局

梅津蕙方 Tel. (0126) 24-1975

〒068-0835 岩見沢市緑が丘4丁目221

ホームページ <http://www.zendouten.jp>

印刷 株式会社 アイワード

● あの日あの時 第14回

全道展と画家と私

高橋 三加子



個展会場にて

その年、箱根寿保さんは、アンフォルメル風な力強い筆勢に、白を基調としたモダンな色彩の絵画、〈日本バンザイ〉で全道美術協会賞を受けた。次の年には岸本裕躬さんが、表現主義的で深い色彩のヒューマンな作品〈インダスの賤民〉で協会賞を受賞する。この2点の作品に大きな衝撃と、感動を与えられた。際立った個性の画面は他を圧倒し、一般出品者のレベルの高さを改めて知らされる。記憶違いでなければ、第18回展と19回展の年であった。私はといえば、初出品と2回目の入選をようやく果たしたものの、100号の面積を持て余し、悩みつ、おろおろしている頃であった。

約半世紀以前の全道展の表現者たちは、さすがに若々しい。澁刺とした美術の探究者であり、自作への野心に満ちあふれた作家集団であった。この精神は現在も連続として続いている。

会員になって2年後、29歳の時にヨーロッパへ行く機会が訪れる。主に美術館巡りが目的であったが、10ヶ月程の旅と滞在の中で、油絵を描きながら過ごすことができた。当時偶然にも小野州一さんと、蛸子善悦さんが家族共々パリに在住されていた。スケッチ旅行や展覧会巡り、飲み会等様々に声をかけていただき、毎日が中身の濃い、充実した時間であった。

ある時コローの大きな展覧会が開かれた。作品を眺めながら、「ここから新しい何かが生まれるのかなあ」小野さんがボツリとつぶやいた。その様子が印象深く、残像のように記憶に映っている。その小野さんから個展の搬入を手伝ってほしいと、連絡があった。早速作品をアトリエから車へ運んでいたところ、ノートルダム寺院を描いた20号程の絵を見せて、どう思うと聞いてきた。いつもの輝くような色彩や軽快なタッチとは異なっていて、グレー調のモノクロームな色彩と、堅牢なマチエール。長い時間をかけて画面と向き合う、もうひとり

の真摯な画家がそこにいた。重厚で存在感のある今迄にない小野作品を、ぜひ出品してほしいと、思わず進言していた。小野さんはうなずいて車に向かって行く。その後出品されたかどうか、聞きそびれたが、忘れられない1点であった。

蛸子さんはパリ郊外の新興商業地にアトリエを構え、私は厚かましくも、ほとんど毎週のように伺っていた。お風呂をいただき、夕食をごちそうになり、蛸子さんの美術談義に耳を傾け、奥さんの幸子さんが好きな詩人、中原中也の詩を語り合い、至福のひとときを過ごしていた。春の半ばには、スペイン旅行に誘っていただいて、蛸子さん運転の家族旅行に、チャッカリ便乗する。フランス、スペインの田舎に立ち寄りながら、10日間の長く忘れられない旅になった。

7月、後ろ髪を引かれる思いで、帰国の途につく。慌ただしく札幌、旭川と個展が続き、現実の時間が飛ぶように過ぎてゆく。その間無性に、日本のひなびた風景に

ふれてみたくなっていた。ヨーロッパの、石の文化に浸ってきた反動かも知れない。日本の旅を敢行する。それは地図を片手に、人里はなれた古寺の仏像を訪ね歩く、気ままなかくれ里を巡る旅でもあった。



左から岸本裕躬、本人、蛸子善悦、右から二人目は伏木田光夫

特集

作品と私

—イメージの原点—

絵画 板谷 諭使

過去に養護学校で勤務をしていた頃に出会った自閉症、ダウン症、他の障がいを持った児童、生徒たちとの出会いが、最近の作品ではイメージの原点になっていることが多い。養護学校には言葉がない子も多いし、食事の仕方、廊下の歩き方、ものの並べ方等様々なこだわりを持った子もいる。水を触ると人が変わった様に興奮する子もいた。視界に入るものが多いと落ち着かなくなる子にはダンボールで個室を作ったりもした。

人間はある感覚が遮断されると、他の感覚が鋭敏になるという。ゆえに盲の子は優れた聴力、触覚を持つ子が多い。言葉のない子は他の方法で気持ちを伝えようとする。それぞれ自分らしさがあり、他とは違う。彼らと接していると時々、画一化された健常の子がかわいそうに見えることさえあった。遠くを見て微笑んでいる子にはどんな世界が見えているのか？ ジャングルジムのてっぺんで目を閉じている子はどんな風を感じているのか？ すべての行動には必ず意味があるはずだが、私には分からないことも多い。しかし、彼らの世界はきっと不思議で素敵な世界なんだろうと思うことがある。

作品は彼らの世界をイメージの原点としているが、画

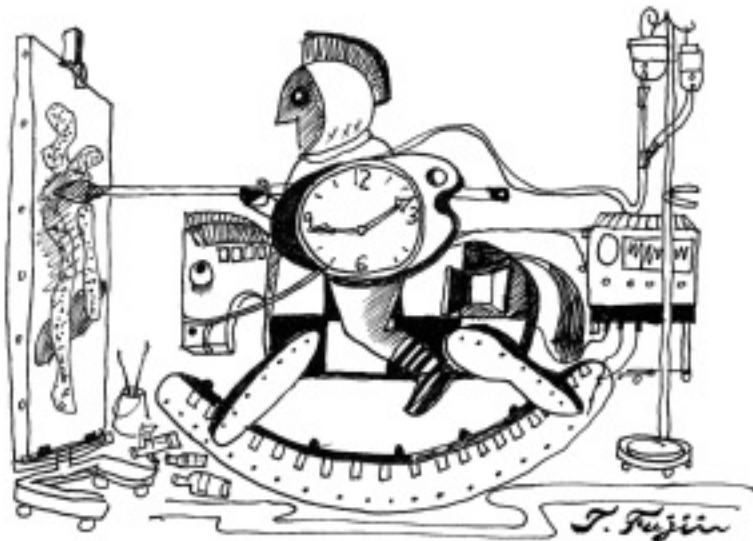
面に何を配置するかは連想ゲーム感覚で決めている。だから「なぜ、ここに〇〇が描かれているのか？」という質問を受けることがあるが論理的に説明することは難しい。難しいが〇〇を描いたということは偶然ではなく必然なんだろうと思うことも多い。



—作品と私—

絵画 藤井 高志

少し気恥ずかしいが、あえて心の内を明かすと、若い頃から「私の絵の前で立ち止まってくれる様な絵」を描きたかった。それは60歳になった今も変わらない。同時に「もう二度と戻らない現在あるいは過去を記録することでノスタルジーと時間の経過を感じさせる作品」を描く事を表現の目標としている。あたかもフォトコラージュの様に個々の部分は写真のように描きたいし、その組み合わせは常識にとらわれない不可思議なものも織り交ぜたい。だから、写実画にも興味があるし、技術的にアップして思うように描きたいが、まだ未熟である。精神の解放がしにくいので、ここ最近では「夢」をテーマとすることで自らを解放している。また、あえてタブーかもしれない自分の小さい頃の「写真」を基に描いたりもした。父が生きている頃は、大作の場合に木炭での下書きを色が見える程徹底して描き込み、それから色を付けるようにと言われた。しかし、現在まで殆どの絵は、描きながら構図が決まっていくケースが多い。その方が自由な表現が出来るように思っ



ている。描き込んでいく中盤以降では、自然に物や色が啓示のように頭に現れる事も多い。これまで日頃のデッサンなど殆どしたことがないので、キャンバスが白いうちは産みの苦しみである。下描きは誰かに描いてもらいたいと冗談では言うものの、自分が生み出さなければ何にも生まれてこない。それでも絵を創り上げていく過程はパズルの様であり、人生の楽しみの中で大部分を占めるものでもある。

—詩的世界が孕むもの—

絵画 米澤 邦子

小樽へ向かうバスの窓から、眩く光る海が見えた。

六月末まで「詩人と美術—瀧口修造のシュルレアリスム展」が、市立小樽美術館・市立文学館で開催された。瀧口を始め、余り目にする機会がなかった国内、外の作家達の作品の数々は、やはり本物の持つ圧倒的な魅力に満ちていた。

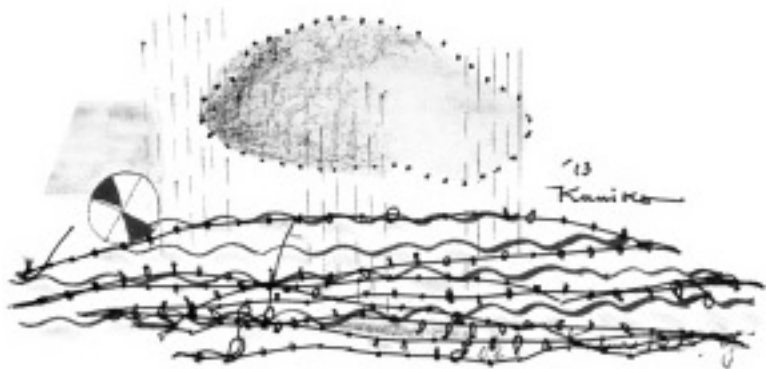
私が50年近くもの間、制作を続けてこられたのは、一つには「詩作」との小さな競合があった、と思っている。詩は生きた言語で表現する、その感覚的な部分はまた、

絵画においても、失ってはいけない大切な要素と思うのだが。ともあれクラシックな小樽美術館の作品群に感動で身震いしながら私は、かつて若い頃、確かに求めた一冊の本のことを思い出していた。

今、その本が手元にある。「滝口修造 画家の沈黙の部分 みすず書房」。表紙は黒と緑の文字、奥付けに1969年第1刷発行、1974年第3刷発行とある。クレーを始め13人の外国の作家について記したものだ。が私は本棚から探し出す今日まで、その存在すら見事に忘れていた訳である。おそらく20代に手にしたのであろう、その時の私と今、現在の私、感受性が同じであるはずがない。

帰路のバスの窓から午後の海が見える。

海は大きく動いているのだろう。けれど流れてはいない。揺れに揺れ、流れているのは常に私、人間の方である。



絵画 渡辺 貞之

この頃私は、絵は描きあげるのではなく何かを「見つけ出す」ことなのではないかと思うようになりました。それは私自身の中にあるイメージが明白でないためなのかも知れません。しかし私の意識外で、突然びっくりするようなものが画面から飛び出てくることがあります。「黒い羽根の天使」シリーズで子どもを描いています。当初、子どもをどう描くかが課題でした。特に頭部の表現に悩みました。ある時、古いキャンパスの上に子どもの顔を描いていると、ちょうど頭部の上に下地の三角状の形が残っていました。それが何とも自分の無意識の中で求めていた思いにピタッと合ったのです。その三角状の形は、どうしても抜けなかった写実の生臭さを消し去ってくれたように思えました。文章にすると理屈っぽくなりますが、それは出会った瞬間に感じたことでした。以来、私が描く子どもの頭部には必ず三角状のものが描かれるようになりました。「あれは角なんですか」とか「帽子ですか?」と訊かれることがありますが、私自身「何を」という特別な意識ではなく、むしろ感覚的に満足している形状なのです。

しかし芸術家の創造の営みは、海辺で砂のお城を築いては流され、流されては築く無心の子どもの戯れに似て

います。やっと見つけ出した自分の表現様式を、再び否定することで、また新しい表現が生まれてくる。その繰り返しが創造の道なのだと思います。そういうことで、もうそろそろ、三角の形は消えて貰わなければならないとも思っています。



版画 竹田 道代

銅版畫の奥深い表現の面白さ、可能性に魅せられて、30年近く主にモノクロの作品を作っています。

制作にあたっては、一つの言葉や形からイメージを膨らませ、美しく魅力的な線や形を展開、再構成をして画面を作っています。



銅版畫は、一度線を引いて腐食されると修正がむずかしいので、何枚もエスキースを造ります。構図が決まると、余り細かい事にこだわらず作業を進めますが、腐食の時間差を用い、銅板を削ったり研いだり、いかに紙の色から黒色までの間に多くのグレイトーンを作るかを考えます。

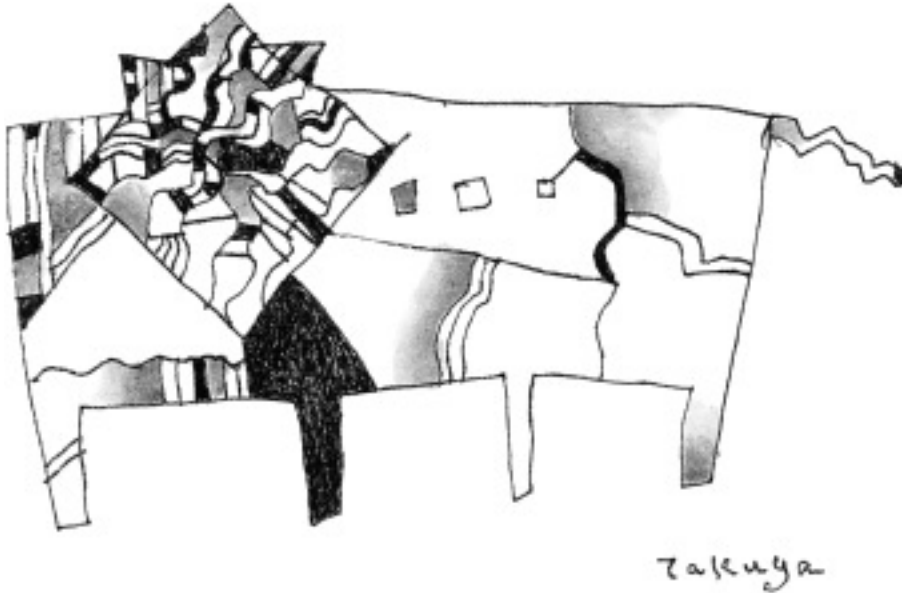
いろいろ作風の変化している私ですが、ベースには学生時代毎日のように目にしていたビーナスの石膏像（かつては学生用玄関に在った。現大谷大学）と、ヨーロッパの美術館で見た、古典絵画や立体の女性像に有ります。特にルーベンスやボッティチェリの美しく優雅な輝きを放つ三美神からは、多方面からインスピレーションを得ました。

これからも、更に力強さやエネルギー発進を加え、私なりのフィルターを通して女性像を表現して行きたいと思っています。

—アネモネのメッセージ—

版画 玉村 拓也

3月のある日。アトリエの肌寒い朝、何を描こうかと案じているとき、密かに私の玉手箱をあける。今までのエスキースが沢山入っているのである。お気に入りの一



枚を取りだす。若者が弓を引く射手の絵である。矢の先には赤いパールがついている。希望の矢という。この矢はどこを射るのか、私も分らない。何度も描き矢の行方を探ぐる。この赤い矢、希望の矢のメッセージを描きたいのである。

次の日、赤い矢に疲れ散歩することにした。日差しもよく、ぶらぶら歩いて行くと、花屋さんがあった。彩とりどりの花きれいである。みな笑っているように見える。

大きな花の陰にアネモネがあった。しばらく見詰めて6、7本買うことにした。「絵を描くのですか」突然の眼力に驚いた。思わず「ハイ」と応える。店の若いお姉さん、顔を見てニコッと頬笑む。

足早に持ち帰る。バランスを見ながら花瓶に生ける。このちぎれ、ちぎれの葉、丸まって可愛い赤ちゃんの手のような。花は、白に青と赤の輪郭、フランスの旗のようである。小品にいいな。このアネモネの不思議な魅力何んであろう。話かけてくれる不思議なアネモネ、アネモネのメッセージを描きたいのである。

手を休め外を眺める。早春の某日、私の小さなドラマである。

—作品コンセプト 2013—

彫刻 川上 加奈

感情や生活習慣、外部刺激や食癖などによる人体のちょっと変わった変化を表現しています。もちろん架空の話です。

今年は「食べることによる副作用」をテーマに制作を進めています。まず、「食べている人」からはじめて「何を食べて」「どうなった」につなげていきます。

副作用ですから人間としては残念な結果なのですが、それを彫刻として、話として(タイトルなど)、面白い方向に持って行けたら成功です。失敗か成功かは、鑑賞者に委ねてしまうことになりますので、温かく見守って頂ければ幸いです。

人体のカタチだけではなく、キャラクターとその日常に目を向けて、ものづくりを楽しんでいきたいと思っています。



彫刻 佐藤 志帆

私は今、礼文島に住んでいる。住み慣れた函館の地を離れ、礼文の自然溢れる地へ来ると、今までの自分の全ての価値観が違って見えた。長い年月をかけ自然が作り出す造形は、圧倒的な存在感で空間を占有し、自分がいかに小さな存在かを論される。今まで自分は人体をモチーフに生きること・生命をテーマに作品を作ってきた。それは、人間の生きる姿に命の根源を見つけ表現したいと思ってきたからだ。作品を自分の姿に重ね合わせ、作ってきたところもある。

しかし、この地へ来て自分の小さな存在を感じ、自分が彫刻を作る意義はあるのだろうかと考えさせられた。こんなに雄大な自然が広がり命の溢れる地で、自分が命の模写をする必要があるのかと。しばらく作品を作らない日々が続いた。作れないでいたといった方が正確かもしれない。だが、しばらくすると意義なんて関係なく作品を作りたい気持ちが生まれてくることに気づいた。感じたことを形として表したいという欲求が自分の中に強くあったのだ。そしてさらに気づいた。自分が表現したいものはこの地にある空間そのもの。生命のエネルギーであり、人間の姿である必要がない、形のない自然そのものであるということに。私が今作っている作品は、今までの作品とは違ったものに見えると思う。自分でもそ

のように作風が変わったことに驚いているが、またこれからの生活の中で自分自身の価値観を変えられるような新しい出来事に出逢えることを楽しみにしながら、たくさんさんの彫刻を作っていきたい。



—雪を焼く—

工芸 小前 晴美

陶芸に取り組み始めた頃は、粘土に彫刻刀で模様をつけ、焼きしめ、陰と陽の対比を表現する技法に熱中しました。その集大成が『陽光』シリーズの作品です。

その後、彩色に関心が移り『風門』シリーズや『佇む

女』などの作品では自分のテーマとなる色を求めて、試行錯誤を重ねました。

そうするうちに、いつしか、寒さで思うように作陶できない北海道の厳しい冬の風景を私なりの色で表現できないものかと思うようになりました。その思いが、窓ガラスにできる霜の花をイメージした『霜華（そうか）』更には、『流水』の誕生へ繋がりました。

今は降り固まった雪に積もる新雪を表現したく、デッサンをし、試作に取り組んでいます。限られた窯のスペースの中で、いかにそれを実現していくか、ここ数年来、悩んでいます。

技法は経験と研究を重ねるごとに向上していくものですが、陶芸の場合、最後には持てるもの全てを窯に委ねなくてはなりません。

先が読めないもどかしさの果てに、繊細にして均整のとれた、想定以上の作品ができる確率をあげるにはどうしたらいいのか日々心を砕き、作陶に向かう今日この頃です。



第 68 回 全道展審査を終えて



6月6日～7日の2日間にわたり行なわれた審査。4部門で一般応募数計588点。
入賞30点、入選232点となりました。各部門の審査委員長より感想を頂きました。

総合審査委員長
絵画部門審査委員長

斉藤 嗣 火

絵画部審査を終えて

上空には大きな飛行船が音も無く飛行し、地上ではヨサコイの最中。老若男女が入り交じり街中に多くの集団を作り、それぞれが競うように舞い、スピーカーのボリュームをいっぱいに上げる。遅かったライラックもやっと咲きだし一気に色彩の多い季節へと変わっていく。

そんな中、さあ、今日から二日間の審査が始まる。搬入者数（点数）は各部共昨年に比べると減少しており、絵画部も若干の減少ではあったがほぼ昨年並みの状況。全体の質が落ちないことを願いつつ審査が始まる。会友、一般の順で作品が流れていき、一点一点に厳しい眼が注がれ、時には議論もなされ進行していく。

会友出品者には長年挑戦し続けている人が多く、その作品の一点一点に作者の変遷振りがうかがえ、又、苦悶しつつ制作に取り組んでいる姿が想像出来る。今後も大勢に巻き込まれることなく、自分の道を進んでほしい。

今回特記される点は協会賞が20歳の学生であった事。若い世代が果敢に挑戦してきて且つ、成果を残すことは会にとっても大いに歓迎するところ。しかし彼らにはこれからまだまだ自分の未知の方向性や可能性を求め、それを表現、形にしていく長く苦しい道程が待っている。全道展としてはこれら若者達とどう係り育てていけるのか、このあたりが魅力ある全道展創りへの新しい展開へ

の一つのキーポイントになるかもしれない。

各部に眼を移してみると、版画部には基礎に裏打ちされた堅実な作品が多く観られた。彫刻部では一般作品にいまひとつ、体ごとぶつかった迫力、気迫ある作品に出会いたかった。工芸部では技法の多様性、それぞれのジャンルを専門的に評価する厳しさを常に感じている。総合審査に於ては各部受賞作品候補を持ちより最終審査を行ったが全体として、全道展としての骨格を充分に保った結果になったと思う。

さて、68回全道展、どれだけの人達の心にどの様に届く会場になっていただろうか。



版画部門の審査を終えて

応募された数点の作品、一度に二、三名分のもので並べられる、今年はどうな作品を見せていただけるかわくわくする審査が始まる。入、落がきまる、2点展示はあるか、賞候補、新会友候補などがあげられる。このような手順の次に、どの賞をどの作品に、それと同時に会友推薦もきめられる。

会友についても複数出品の中から展示作品を決め、それと同時に会友賞、会員推挙などをあげその中より会友賞、会員推挙がきめられた。

さてこのようなことで応募作品を見せていただく中で、一般公募も会友出品にも一点出品が何人かみられた。公募展で作品を審査する時、何を指して創っているか、技量がどうであるかを複数の作品でみせてもらいたいものである。一点ではなにか物足らなさを感じたのは残念であった。

それと複数出品の場合も、内容のちがったものの出品の場合、より多くのことを行なっていることを示しているのかと思うが疑問を感じた。

版は刷りでということと同じ版でも仕上りは異なる。刷りでの工夫、冒険を試みることににより新しい発見ができるのではないだろうか。

あの作風の作品がみられないと聞くと不出品とのこと。全道展を目ざすのであれば続けての出品がほしい。

ともあれ見ごたえのある作品の展示で活気のあるものとなった。来年もより深みのある作品を期待します。



彫刻の部講評

全道展の審査は、厳しいことで知られていますが、特に彫刻部の審査は他の部門に比べ一段と厳しいものがあります。その理由のひとつには全道展の質を落としたいという会員の気持ちがあり彫刻部の会員には特にそういう気持ち強い会員が多いのでしょう。

今回の全道展彫刻部の会場を見渡してみても感じたのは、会友の作品がとても充実していて、どの作品を見ても良質な佳作が多く、Zen No.46で伊藤寿朗会員も記されていましたが会友の作品が充実する公募展がその質を決めるのかと思います。

これまでの経緯を振り返ると彫刻部に於いては、一般出品者数の減少を認めざるを得ないところですが、全道展彫刻部は、一般出品者、会友とも精力的に大作を制作し出品する作家が多く、会場全体を見渡してみても出品点数以上の迫力を見て取れます。その中でも今回展で新会友になられた帯広の森戸春樹さんの、二年連続で巨木を使って出品された大作「怎麼生 Alcor・説破 Rigel」は、その存在感と迫力を感じるものでありました。釧路の小原俊哉さんもここ数年の等身大の人物像は、造形的に若干の弱さが残るものの、見るものに作家の情熱がひしひしと伝わる良作を出品されてきました。また佳作賞を受賞されました釧路の福江良純さんの「櫛」は木を素材とした胸像であり、作品の質の高さは、今回賞以上のものを感じました。奨励賞を受賞されました湧別町の玉井英男さんの「無」は、これからの全道展彫刻部がどの方向に向かうのかの試金石となりうるものであると感じます。いずれも道東の作家の方が今回展で活躍されていますことは、とてもいいことのように思えます。

新会員に推挙されました東京の谷内健さんの等身大の具象作品「陽炎」は、その造詣の深さを感じ、特に粘土付けのいぶし銀の技術は印象的でした。札幌の山本美沙さんの「風」は鉄の高い溶接技術に加えリングがらせん状に切り取られる部分が小気味良く感じました。

すばらしい作家二人を会員として迎え入れたことは、うれしい限りであります。

彫刻を制作し発表し続けるということは、多くの忍耐と困難が付きまとうものだと思いますが、その上でモチベーションを維持した魅力的な作品作り続けたいですし、見ていきたいと感じました。



工芸部門審査委員長
石 山 和 雄

工芸の審査を終えて

2日目の搬入立合の前に前日の搬入状況を見た。いつもの年よりも搬入点数がすこぶる少ない。今日に集中するのか……だが低調のまま受付が終了した。審査当日、会員みんなが何故、今年はこんなに少ないのか半信半疑のまま審査する事となった。又、会友2名の脱会もあって（両氏とも会員への期待が高かっただけに）審査雰囲気は、明るいとは言いがたい状況であった。

審査は入落から始まったが、搬入点数が少ないだけに作品すべて入選させたいとの気持ちもあったが今まで通り厳重な審査となった。

一般では15点の入選となった。その内、佳作賞2点、奨励賞5点が入賞となる。佳作賞「種の起源」阿部榮さんの作品は金属（ステンレス）を使った作品で曲線によ



り構成され金属特有の冷たさを持ちながらも大きな作品に仕上がっている。2年連続の佳作賞で新会友となった。佳作賞「生命の讃歌II」田中豊さんの陶作品は伝統的黃イラボ（釉薬）調の明るい色彩の中に一部窯変した様な模様に変化を与え品格のある作品に仕上がっている。ベテランの仕事である。

奨励賞「旅愁」遊佐隅江さんの陶作品は全体が丸みのある柔らかなフォルムの中に細密な象眼を施した表現は長く陶芸を続けてきた力量を感じさせる。過去の実績を含めて新会友となった。

会友賞「風の奏」新関千裕さんのガラス作品は変形が可能な温度域のすこぶる短かい時間で自分の思いを造形する瞬間の作品である。生命を感じさせる作品となった。今回の審査を終えて、前にも述べたが搬入点数が異状に少なかった事は今後の大きな課題となった。どうすべきか、会員相互が話し合い、なんらかの手立を考える必要性を感じた。であるが、会員、会友、一般の作品レベルは確実に向上していると感じた。とは言うものの、私を含めて切磋琢磨し、さらなる飛躍を期したいものである。

第55回 学生美術全道展

10月5日(土)～10月9日(水)

※ 月曜日休館

札幌市民ギャラリー

授賞式・作品批評会

10月6日(日)13時より

第3回 全道展新鋭展

10月31日(木)～11月5日(火)

大同ギャラリー

札幌市中央区北3条西3丁目1

札幌大同生命ビル3・4階 011-241-8223

オープニングパーティー

10月31日(木)18:00～

第69回 全道展

2014年6月14日(土)

～22日(日)

授賞式・パーティ

2014年6月21日・18:00～

全日空ホテル

受賞のよろこび



喜びの笑顔！ 6月15日(土)全日空ホテルにて

絵画（協会賞） 苛 原 治（札幌）

この度は協会賞をいただきとても嬉しく思います。協会賞受賞の知らせが届いたのは大学にいる時で、知らせを聞いたとき自分はとても信じられなくて、誤報じゃないかと思うくらいでした。自分は今の札幌大谷大学に入ってから絵画を学ぶようになりました。まだまだ技術は低く経験も浅いので、今回の受賞を機により良い作品が描けるように様々なことに取り組み、技術を高め自分の絵の世界を作って行けるよう努力したいと思います。今回は本当にありがとうございました。

絵画（佳作賞） 小 林 麻 美（札幌）

この度は賞を頂き、本当にありがとうございます。お世話になった方々に心から感謝申し上げます。作品は妊娠期にお腹の子や、今は亡き家族の事を考え制作したものです。祖父が全道展の会員でしたので、たくさんの絵が展示された全道展の会場は私の原風景です。祖父と父の死に、子供の誕生が重なり、今は自己と他者の共鳴や境界について考えながら、自分の原点を確かめるような想いでいます。人生の転機に描いた作品に賞を頂けたことに心から感謝し、また精進致します。

絵画（北海道新聞社賞） 池 田 宣 弘（札幌）

初出品以来私にとって6月が一年の締めくくりの月になっておりました。会場へ向う時の期待感、そして帰り道での反省と後悔。そんな体験を毎年繰り返しそれを発奮材料として来ました。そのパワーの源は全道展の活気溢れる作品群だと実感します。このすばらしい集団に加わらせて頂く事に喜びを感じます。この度道新賞という身に余る賞と会友への推薦を賜わりまして心より感謝御礼申し上げます。

絵画（奨励賞） 岩 野 風 雅（札幌）

この度の奨励賞受賞嬉しく思います。初出品で賞を頂けるとは思ってもおらず、驚くばかりであります。賞を頂くと、同時に恐ろしい気持ちにもなります。この次に制作する作品は今回のものを超えられるかという自己に対するプレッシャーです。毎回行き当たりばったりで描き、まぐれでできたような作品ばかりですので、次はあるのかと言う恐怖に常に苛まれています。この自分の技術的、そして精神的な壁を超えられるかが当面の課題に

なりそうです。この度はどうもありがとうございました。

絵画（奨励賞） 岩 山 きよ子（函館）

日々忙がしきの中で、何か好きな事をするとしたら絵を描きたいと願いつつ、機会ある事に絵を観ては諦めていた事が、実現できとても嬉しく思います。又これから少しでも前進できるような絵を描きたいと思っています。奨励賞ありがとうございました。

絵画（奨励賞） 太 田 玲 子（北見）

数十年前、小学生の私は両親と根室市公民館での全道展巡回展を訪れました。所狭しと並んだ作品を見上げ、その大きさに圧倒されたことを思い出します。それから全道展は憧れとなり、出会いに恵まれ、制作を続けてきました。迷い悩むことが多いですが、その過程でしか現れない情景があります。制作の原点は生まれ育った根室の風景。潮風と共に生きるものたちが、私の作品の要素となっています。ご指導いただいた方々に感謝の気持ちで一杯です。今後も努力を続けて参ります。

絵画（奨励賞） 岡 野 修 己（釧路）

いつの間にやら、外で描くようになりました。（クサイ、キタナイ、セマイ等々……）これがなかなかの快感です。

限りなく広がる、自然の空間、風に吹かれ、気分は最高です。

この度は奨励賞をいただき、私のテーマ「眠れぬ宙」に未知の希望が増えました。ありがとうございます。

雨にも負けず、風にも夏の寒さにも負けずしばらくは、外で描き続けます。

絵画（奨励賞） 佐 藤 史 奈（札幌）

流水を題材に描いています。風が創り出す一期一会の作品は、生れたばかりの薄葉だったり、埋め尽す平原だったり、ごつい岩のようだったり、現れ、去り、くっつき、離れ、変幻自在に形は動きます。海面に出ている毅然たる姿と隠れている氷海の中、それらはどんな表情をしているのか。想像の世界が広がります。この度、思いがけない賞を頂きました。ここまで引っ張って下さいました先生方、皆様方に心よりお礼を申し上げます。ありがとうございました。

絵画（奨励賞） 中 川 治（札幌）

この度は、受賞大変嬉しく思います。今後も慢心することなく、真摯に絵画や自分の生き方と向き合い、制作を行っていきたいと思います。

ご指導のほど、よろしくお願いいたします。

絵画（奨励賞） 早 瀬 文 子（寿都）

この度奨励賞受賞、ビックリのあまり体が震えて固まってしまいました。ありがとうございました。初めて市民ギャラリーで全道展の作品を見て、家に帰ってから、2、3日何か熱いものを感じていました。初出品から3年入選、4年目入賞、アドバイス、指導して下さる先生のお言葉の意味も、自分のないに近い技術面でしか理解出来ず、ただ前向きにキャンパスに向かってきました。いただいた賞をエネルギーに前進して行きたいと思っています。

前へ進みます

絵画（奨励賞） 藤 田 博 子（札幌）

この度は賞を頂きありがとうございます。やっと日常の生活と制作への日々のバランスがうまく維持出来るようになって来た所でしたので、この賞はとてもうれしく感謝しております。ここまでこれたのは先輩の自ら苦悩して来たからこそ言える助言の数々を聞き沢山のエネルギーを頂いたからです。又、一步発見する喜びを感じながら制作に取り組んで行きたいと思っております。

絵画（奨励賞） モリ ケンイチ（札幌）

この度は奨励賞という立派な賞をいただきましてありがとうございました。絵は長年来制作してまいりましたが、しばらく北海道を離れていたこともあり、地元の美術協会展への出品は今回が初めての試みでした。道内有数の美術協会展で、初出品にもかかわらず賞をいただけたということは誠に光栄なことであり、身の引き締まる思いです。今回の受賞を今後の活動の大きな励みとして、益々精進を重ねてまいりたいと存じます。

版画（奨励賞） 三 浦 正 志（北広島）

定年後の趣味を目的に軽い気持ちで入った版画の世界でしたが、思いもかけぬ深みにはまり、師の「版画でなければ表現出来ないものとは」との言葉が常に頭から離れません。

全道展は、雲の上の世界で、初めての入選もうれしきより自分のレベルの低さに会場から作品をはずしたいと思う程でした。今回の作品もとても受賞に値するものとは思えませんが、自分の道に迷っている私への諸先生からの叱咤激励と捉え感謝しております。

彫刻（奨励賞） 浅井 富士子（札幌）

63歳で初めて粘土に触れ、70歳で初個展、今、80歳。つい先日、門馬ギャラリーで傘寿展を開いたばかりである。美術に関しては全くの門外漢で、何の素養もない私だが、よき師に恵まれ、今はすっかり粘土の魅力にとりつかれている。もし私にいいところがあるとすれば、根気のいいところぐらいだろうか。でも好きなのでなかなか止められない。こんな私だが、いやこんな私だからこそ、今回の奨励賞受賞はとても嬉しい。

彫刻（奨励賞） 玉井 英男（湧別）

今回で出品2回目の「全道展」。長い間、自分の思いでやってきた造形。事務局、関係者、そして大勢の方々に観て頂いて嬉しく思っております。

これからも若い人達が全道展から育って行く、いつまでもいつまでも魅力ある全道展で、皆様が幸せでありますように。

工芸（奨励賞） 阿部 綾子（千葉）

奨励賞を頂き、ありがとうございます。会員の先生方、先輩の皆様方に、感謝申し上げます。

陶芸を始めて10年が過ぎ、陶芸人生の第2幕が始まったばかりです。なかなか思うようには出来ないことも多いけれど、土と過ごす時間が楽しい。ただ、楽しい。

作品は自分自身なのだと思います。感受性豊かに、子供のような柔らかい心でありたい。全道展会場での漲るエネルギー、全身で感じて千葉に戻りました。一步一步ですが、楽しいを大事に、進んでいきたいです。

絵画・新会友 竹生 洋子（札幌）

会友推薦、有りがとうございました。この日をずっと夢見て居りました。自分の作風、自分の作品が出来るまで、課題はいっぱいでした。一枚一枚、小さな作品で、試行錯誤し、大きな作品に仕上げていく作業が続けています。会友の道は厳しいと、諸先生方からお聞きしまし



た。今まで以上に精進致します。どうぞ宜しくお願い致します。

版画・新会友 高崎 勝司（恵庭）

この度は新会友推薦ありがとうございました。

振り返ってみますと、私のどの作品も思い込みと勘違いが詰まった未完の作ばかりです。しかも年のせいかあきらめか、それを楽しんでいるところもあるような気がします。

今年68歳です。これからの時間は限られています。今回与えていただいた喜びを今後のエネルギーにして少しでも未完の魅力を感じる作品を制作していきたいと思います。

版画・新会友 山本 修一（札幌）

この度の会友推薦は、俄には信じられませんでした。木版画を始めて10年目に、初出展が入選となりその3年後には1度目の奨励賞と恵まれ過ぎて、少なからず地に足が着かなかった時もありました。その反省もあり、遅蒔ながら絵の基礎を習うべく目下教室に通っている有り様です。今回の推薦も実力の伴わない幸運だっただけのことと肝に銘じ、指頭が動くうちはベニヤ板彫りを続けたいと考えています。有り難うございました。

彫刻・新会友 小原 俊哉（釧路）

この度、会友にご推薦頂き、ありがとうございました。全道展でいつか賞を頂ける作品をとの思いで今までやって来ましたが、会友にまでなれるとは思いませんでした。これで思い残す事は有りません。ありがとうございました。

チェーン・ブロックがほしい

彫刻・新会友 森戸 春樹（帯広）

作品づくりに使える時間を持てるようになってからのこの4年は、絵画や版画、彫刻を毎日学んでいた学生時



代ほどではないにしても濃密な日々でした。この度の会友推薦は、彫刻を続けなさい。「体力を維持し、気力を充実しなさい。」と励まされたと思います。

腰痛と腱鞘炎は職業病と臆せず云えるようになりたいものです。

また、三年振りで高校の美術講師に復帰しました。高校生の若い感性を作品づくりに活かせたらと思っています。

工芸・新会友 **阿 部 榮** (札幌)

この度は、佳作賞受賞、会友推薦をいただき大変嬉しく、同時に身が引きしめる思いでいっぱいです。私が全道展を知ったのは60歳で今から4年前でした。右も左も何もわからないまま申込み用紙を手に入れたのがつい昨日のことの様に思えます。こんな私を受け入れて下さった全道美術協会に深く感謝すると共に今後も技術と美の追求に日夜がんばってゆきたいと思います。どうぞよろしくお願い致します。本当にありがとうございます。

絵画・新会員 **笠 原 悦 子** (北広島)

会員推挙のお知らせをいただき、心から喜びを実感いたしました。長い間ひたすらキャンバスに向かい、自分自身が納得する表現を求めて描き続けました。この間、多くの方々から頂いた励ましと支えが私の力となりました。心から感謝申し上げます。

これを新たなスタート台として絵画への感覚を磨きながら、自己表現を求め続けて描いて行きたいと思います。

第39回展巻頭言を読んで

絵画・新会員 **島 津 明 美** (千歳)

これは「若き画友への手紙」として全道展の意義、理念を丁寧に書かれたものでした。[全道展は、自らの結審の場][ひたすら自己の信念による制作をして下さい][偉大な展望と、謙虚な姿勢を抱き合わせながら、こうした思想の中で真実を形造ることに専念しようではありませんか]などです。私も、思慮し、受け止め、制作に努めてゆきたいと思います。会員推挙有り難うございました。

絵画・新会員 **高 田 健 治** (幕別)

やはり、一般入選や受賞、会友推薦のときよりもどこか達成感がありますね。それは会友推薦以降の作品では、時間はかけているはずなのにさっぱり前へ進まず、本当にメ切りギリギリまで格闘することの連続だったからかもしれません。しかし、いまだにどうやったら立派な作品ができるのかという以前に、どういう方法で絵を描く

のかということが定まっていません……と、不安でいっぱいですが、まずは会員としての自覚を身につけたいですね。

あの日のこと

絵画・新会員 **高 橋 弘 道** (釧路)

地下鉄東西線バスセンター前の10番出口に向って歩き階段を上り外に出ると、むせかえる暑さの中、信号を渡るとリラの花が咲き乱れ、札幌市民ギャラリーの全道展の大きな看板が見える。この斬新な看板は26年を隔た今も色の変化はあるが同じ姿で迎えてくれる。この度の第68回展での会員推挙は、今までの自分の創作を認めて頂いたと感謝し気持ちを新たに、全道展の会員として質の高い自分の作品が出来るよう邁進して行きたいと思っています。

版画・新会員 **澁 谷 美 求** (札幌)

このたびの会友賞、会員推挙有り難うございました。全道展を通じて多くの出会いがあった事を思い出します。振り返ってみると、94年に出品して以来、満足のいく作品を創れた時もあり、上手くいかない時もありました。今回を一つの転機ととらえて良い作品を制作していきたいと思います。今後とも宜しくお願いいたします。

初 入 選

絵画 **伊 勢 幸 久** (札幌)

日本の近代化と戦後の復興を支えた石炭の産出を担った炭鉱。エネルギーの転換により役目を終えて遺産として静かに佇んでいます。これに魅かれ描き続けています。関った多くの人々を想うからでしょうか。

趣味で描き始めて10年。初めての出品で入選させていただき光栄です。作品は装置の鉄錆の表現に工夫しました。

これからも出品させていただくつもりです。よろしくお願いします。

絵画 **竹 内 弘 子** (北広島)

一度で良いから、自分が描いた大きな絵を大きな会場で見たい。そんな思いで挑戦したF100は、今まで描いた小品とは訳が違いました。悪戦苦闘の末、今回なんとか初出品にこぎつけ、幸運にも願いがかないました。会場では、たくさんの個性的な作品が発するエネルギーに圧倒され、魔界に足を突っ込んだ気さえしました。喜びとは程遠い実感です。この先どうしようか？ 自分を確認しつつキャンバスに向かうしかなさそうです。

版画 田 中 正 次 (札幌)

私のように趣味で版画の創作をしている者にとって、製作した作品を誰かに見て貰うこともなく、又、評価を受ける機会もなく、単に自己満足で終わっていました。しかし、全道展のような北海道最大、最高の公募展に出品すると云う事は、かなり勇気のいることでした。でも、自分の作品を単なる自己満足で終わらせることなく、評価を受けてみたいという気持ちが強くなり、勇気を振り絞り出品した次第です。結果、入選することができ、これからの創作活動の励みになるとともに、更なる意欲を得ることが出来ました。

版画 久保田 道 子 (札幌)

全道展の版画に魅せられている1人です。今回、そこに自身の作品が展示されてある事に不思議さと幸せをしみじみ感じております。1年位前から、グランド処理して寝かせておいた銅版とデッサン……30年程続けてきた絵をリセットする気持ちで制作しました。背中を押して下さった先生、工房の先輩仲間達に感謝の気持ちでいっぱいです。

そして、家族にも!! 今後は傑作を目指して頑張ります。熱く雄大な全道展である事を願っております。ありがとうございました。

絵画 山 口 悟 巳 (伊達)

やりました、ありがとうございます、とてもうれしいです。スタートラインに立てた気がします。

子供がふしぎの星へ導かれ、魔法をさずかり、地球を平和にしていく、と言うストーリーを描いています。

時代の感性を得て、自分のイメージを表現していきたい。やさしく、激しく、明るく、チャレンジしていこうと思います。今後ともよろしくお願い致します。

工芸 洗 芳 正 (美瑛)

入選ありがとうございました。この作品を作れますのは美瑛町森林組合の皆様の御協力で、注文したら即用意して頂けます。それと美瑛町長さんの努力で「日本で最も美しい村」に認定されているのでそこを少しでも残したい。田畑の作物も芽が出て収穫の過程まで日々変化しています。その風景は相手が木の板ですので思ったようになってくれません。入選しましたからには恥じないよう入賞めざしてとりくんでまいります。

原稿を寄せて頂いた皆様ありがとうございました。

(成田敬子、高田明子、久野省司、亀岡トモ子、富田忠征、金田隆喜)

<追補>…「受賞のよろこび」

絵画 (佳作賞) 岩 永 総 子 (旭川)

この度は佳作賞をいただき、心よりお礼申し上げます。初の個展会場で誕生日を迎えた際、受賞のお知らせをいただきました。主人と息子が誕生祝いに持って来てくれた花束が、そのまま受賞祝いの花束になり、私にとって、生涯忘れることのない誕生日です。

家事に育児に仕事にと忙しい中、地元の画廊や画材店の方々に支えられ制作も続けられています。こうした方々への感謝も込めて、もっとと良い作品にしてゆきたいと思っています。

(経緯)

原稿の収受に不手際があり、お二人の原稿掲載が出来ませんでした。お二人には深くお詫びし、再度原稿を寄せていただきましたので、追加させていただきました。(庶務部編集担当)

絵画 (会友賞) 西 村 徳 清 (旭川)

今年は出展の3ヶ月前に描いていた人物を消し始めました。端から見れば正気の沙汰ではないかもしれませんが、描き手の意図を超えた意味や物語は必要ないという拒否反応が出たのでしょう。ただ、実行に移すことができたのは、自らの闘いを後押しし、受け止めてくれる全道展という存在があったからに他なりません。会員、関係の皆様には心より感謝申し上げます。

■佐久間恭子遺作展を訪れて■

2012年11月9日、室蘭市民美術館で開催されていた「佐久間恭子遺作展」を訪れた。この日は曇りで、冬の到来を告げる雪虫が無数に飛び交い、室蘭の街がより曇って見えていた。室蘭駅から10分ほど歩き美術館にたどり着くと、佐久間先生が足を組み腰掛けしている絵の看板が出迎えてくれた。

館内に入り佐久間恭子遺作展の会場に来ると、多くの観覧者で賑わっていた。会場を見回すと大胆な色使いの作品群が目飛び込んでくる。中でも、第30回全道展で佐久間先生が会員推挙を果たしたときの作品「ルシーダA」は、緑と赤の補色対比で構成された画面や独特のデフォルメされた人物が印象的で、強い存在感を漂わせている。会場を観ている途中で室蘭市民美術館の小原館長に展示について話を聞くことができた。

「この展示は室蘭市民美術館をささえる会が主催となり、佐久間先生に縁のある方々や全道展室蘭支部の皆様にご協力していただき、工藤善蔵会員には作品点数の取りまとめなど、ご協力をしていただきました。佐久間先生の代表作である『バク』シリーズは4点ありますが、残念ながらその内3点は劣化が著しいため、今回は1点しか展示できなかった」と語った。

佐久間先生の作品を観ていくと、ポイントとして「風

土性」というテーマが見えてくる。この遺作展の冊子にも掲載されていたが、佐久間先生が会友



「新日鉄」 2011年5月3日 絶筆

の時に書いた、第28回全道展の図録に掲載されている文章にこう書いている。「最近絵画の風土性についての思考を深め、広がりを持つことをテーマに生かしイメージ化することを考えています。こわれかけている自然の再認識も含めて、それも私自身発見できないでいる美観に対するものですが探りたいと思っているのです……」

佐久間先生が会員になって数年後、室蘭を描いた「思い出テーブル」シリーズがある。その3点の作品はどれも、室蘭の活気ある風景の断面を複数オーバーラップさせた表現で画面を構成している。

こうした情景は、佐久間先生の室蘭への愛情が強く感じられると同時に、室蘭市民もこの情景をこよなく愛し佐久間先生の作品に共感したのではないだろうか。そして、絶筆になった作品も室蘭の風景だった。

(宮地 明人)

第 68 回全道展が終了し、3 週間ほど経った 7 月 14 日、絵画部門の木村富秋会員の自宅を訪れた。

この日は晴天で午後 5 時を過ぎても日差しがきつく、とても暑い日であった。地下鉄麻生駅を降り、数分経つと富秋会員が車で迎えに来てくださった。しばらく車を走らせ自宅に到着。玄関を上がると由紀子会員が出迎えてくださり、「取材が終わったら御飯食べてってね」と夕飯の用意がされていた。

早速アトリエに入ると、整理整頓された空間が広がっていた。長方形の窓が 2 つ連なって、天井までのびている特殊な造りの内装である。このことについて尋ねてみた。この自宅を建てて間もなく、すぐ隣りにマンションが建ち日光が入らなくなったので、この形に改装したそ



うだ。他にもアトリエから外へ作品の搬入出をする専用の細長いドアを設けるなど、アトリエとしての工夫が見られた。私が特に気になった物はパレットである。人口の大理石を広くカットしたもので、旧自宅のキッチンの流し台に使われていた外装部分だそう。とても使い心地がよさ

そうである。作業が終わればすぐにきれいに拭き取り元の状態に戻すと言う。

富秋会員に自身の作品についてコメントをいただいた。

「ここ 10 数年、『喜び』『悲しみ』『安らぎ』といった人間の普遍的感情を色・形・面におき換え、それらを組み立て、スカーッとさわやかに出現する造形美を大切にしたい」と語る。

今の自宅を建てて 6 年ぐらいいになるという。以前と今のアトリエではどのような違いがあるかを奥様の由紀子会員も交えてお聞きした。

「以前の自宅のアトリエは今よりも広く、200 号を置いても余裕があったが、アトリエとプライベート空間が 1 階と 2 階に分かれていたため、家事と制作の切り替えが大変でした。現アトリエはキッチンと隣り合わせになっているので、食事の支度をしながらの制作です。この『ながら制作』がとっても自然で、作品づくりに行き詰まった時など、結構ストレス解消になっている気がします」と、主に由紀子会員が話してくださった。この後、美味しいお食事とお酒も入り、話が弾んだ。

アトリエはやはり使い勝手の良さが制作に大きな影響を与える。今回の訪問で、制作環境とそこで生まれる作品は密接に関係していると感じた。

(2013.7.25 宮地明人 記)



寄稿

■『Zen』の意図するところ

「Zen」が発行されて 35 年 (No.48) となった。

「Zen」発行の発案者として、その経緯を述べてみましょう。公募団体として一般への広報は、発行当時展覧会時の図録しかなく、一般出品者、観賞者へのアピールがないのに不満があり、機関誌として年 2 回の発行を考えた。第 1 回目は展覧会開催に当たってのお知らせと全道展の現状、第 2 回目は展覧会終了後の報告 (のちに講評集ともなった)。

刊行するにも会の財政厳しく費用の捻出に苦慮、画材店、画廊、絵の具メーカーなどの広告協賛を得て発行するに至った次第である。第 1 号 (1978.12.20) を振り返ってみると、B 5 版 8 頁には図版、写真をうまく構成、小さな文字がぎっしり組まれている。第一面は「第 34 回全道展にむけて」と題して本田明二さんが 33 回展の反省を交えて 34 回展への意気込みが

渡 会 純 价

書かれている。2 頁目は大谷久子さんの随想、3 頁「わが思索と行動」と一原有徳さん。4～5 頁岸本裕躬さんの「作家探訪神田一明」6、7 頁「全道展とわたし」と題して会友を混えての記事、8 頁は全道展のお知らせ、動向、個人情報など実に充実した内容が盛り込まれている。

No.35 までは B 5 版ながら内容は全道展の現況がつぶさにみてとれるし、時には内部検証なる論まで戦わしている。

先日にも拡大会務委員会で「Zen」について論じあったが、「Zen」刊行の意図の原点に帰って機関紙、即ち会の活動内容や発表、宣伝、連絡のための情報誌であって欲しい。そして、この小誌は美術関係者のみならず、多くの一般ファンにも気軽に手にして愛読されることを念においていただきたい。

「全道展と半世紀」を読んで

(絵画) 鶴江 和子 (札幌)

昨年、の図録で、神田日勝の写真に驚きました。美術館で解説ボランティアをしていた時の、パネルの写真と同じだったからです。撮影時の状況を知り、だからこんなリラックスした表情だったのだと思いました。この写真を残して下さった渡邊禎祥氏に感謝です。会場でご本人ともお会いでき、入選して良かったと思いました。

(彫刻) 九兵衛 真一 (札幌)

3.11 に福島から避難した母と共に、公募展の作品を車椅子で観たのが第 66 回展 (初出品) でした。大震災 1 周年の早朝にこの地で、天に召され、失意から脱する為に、今回の第 68 回展作品に取り組んでいます。郷里福島は、いまだに不安の中、思いをはせております。

(絵画) 千葉 邦子 (札幌)

豊平川が流れる石山大橋方面まで、30 分ぐらい歩いています。夫 82 歳、私 75 歳になってから、夕張から札幌へ転居して 2 年。新しい土地に慣れようと思ひ、町内会、老人クラブに参加しています。

旅終えて

(絵画) 上原 リウ子 (札幌)

また春がやってきました。一年程描く事への楽しさからはぐれ、気が付けば自分探しの長い旅の中に。残雪の中で春を待ち、生きる事への喜びをかみしめる漁婦達、

じっと沖を見つめる祖父の面影など、再び描く事への喜びがやって来ました。残雪を押し退けて生きる草木等に、私は大きな答えを見つけ、長い旅を終えて心も体も健康を取り戻し、元気に筆を走らせています。 25.4.27 記

身の回りの出来事

(絵画) 松原 守 (帯広)

今まで多くの出来事があったが、71 歳になった今、大してそれはない。ただ昨年、全道展に初出品し入選した事が、絵を描くことの意欲と情熱を継続してくれているのが何よりうれしい。今年も出品に向けて制作しているが、何もまとまっていけない。自身納得する事は至難の事。あまり欲張らず、もう少し頑張ってみようかな。大変な出来事であり、幸せな事です。 25.4.5 記

(絵画) 中台 一子 (苫小牧)

好きなヒマワリを描き続けて十数年になります。

いまだにキャンバスに蕾のままです。

この度、入選で少し咲いてくれたような気がして喜んでおります。

これから何時の日か満開に咲く事を心してキャンバスに向き合っていきたい、そう思っております。

ありがとうございます。

日高管内の近況 第 37 回日高管内道民芸術祭 (絵画展) を管内 8 町の美術団体の作品を浦河町にて開催致します。

期間 平成 25 年 11 月 23 日(土) 24 日(日)

会場 浦河町総合文化会館 (文責 清水)

渡邊禎祥会員に紺綬褒章

渡邊禎祥会員が、画業半世紀の節目として、帯広市に絵画 6 点を寄贈し、昨年 7 月紺綬褒章を受章されました。

「二百海里の夜」など寄贈した作品は、帯広百年記念館に収蔵されています。

● 編集後記 ●

Zen 48 号に原稿を書いて頂いた皆様ありがとうございました。今回 Zen の発行に際し色々な意見を頂いた事、改めて Zen に目を向けるいい機会になったと思います。今回は一般出品者より原稿が多く寄せられました。

会員、会友、一般出品者、この三つが一つとなって全道展!!

そう感じました。

庶務部編集担当 木滑、吉川、富田 (文責)